

第4章 自然科学分析

第1節 分析の概要

本節では、次節以降に記載する出土柱材の樹種同定及び放射性炭素年代測定を実施した経緯と、結果の概要及び所見を述べる。

分析の経緯

A地点第2調査面のSP4から出土した柱材を対象に、当遺跡における木材利用のあり方を検討するため樹種同定を行った。また、この遺構から時期判断の目安となる土器等が出土しなかつたため、遺構の年代を推定する目的で放射性炭素年代測定(AMS法)を実施した。

分析結果及び所見

樹種同定分析の結果、柱材の樹種は針葉樹のカヤであった。平成26年度発掘区では、花粉分析により古墳時代から中世にかけて植生の大きな変化は認められず、丘陵地に照葉樹林が発達し、その上部の山地には落葉広葉樹林とともにスギ林も混在するが、中世以降にはスギ属の花粉化石が減少しマツ属が増加する傾向が明らかとなっている¹⁾。県内で古代又は古代の可能性がある柱材には、飛騨市杉崎廃寺跡でクリ15点・ヒノキ4点(古墳時代末期～平安時代初期)、可児市の柿田遺跡でクリ1点・コウヤマキ2点・ヒノキ1点(古墳時代末期～平安時代)、アスナロ2点・カヤ16点・クリ13点・コウヤマキ8点・サワラ1点・ヒノキ21点・ヒノキ科6点(平安時代～鎌倉時代)が知られており³⁾、他に美濃加茂市の佐口遺跡²⁾ではヒノキ1点(奈良時代)が確認されている。今後の分析試料の増加により、古代における建築材の樹種選択性について検討することが可能と考えられる。また、放射性炭素年代測定の結果、柱材の曆年代は6世紀中頃～7世紀中頃と考えられるものの、古木効果の影響を受けている可能性もあり、その場合には伐採年代は測定結果よりも新しいとの結果が得られた。A地点第2調査面で検出した竪穴建物跡の時期幅は6世紀末から7世紀後葉までであり、この分析結果と整合している。

注

1) 岐阜県文化財保護センター2018『六里遺跡・稻荷遺跡』

2) 団体法人岐阜県文化財保護センター2001『佐口遺跡』

3) 鈴木 元 2012「21 岐阜県／出土木製品用材データベース」『木の考古学—出土木製品用材データベース』(伊東隆夫・山田昌久編)、海青社

第2節 出土柱材の樹種同定

1 はじめに

SP4から出土した木製品について樹種同定を行なった。分析は、小林克也(株式会社イビソクの協力機関である株式会社パレオ・ラボ)が担当した。

2 試料と方法

試料は、SP 4 から出土した柱材 1 点である。時期については、7世紀後葉以降と考えられている。試料について、切片採取前に木取りの確認を行なった。樹種同定は、材の横断面（木口）、接線断面（板目）、放射断面（柾目）について、カミソリで薄い切片を切り出し、ガムクロラールで封入して永久プレパラートを作製した。その後乾燥させ、光学顕微鏡にて検鏡及び写真撮影を行なった。

3 結果

同定の結果、柱材は針葉樹のカヤであった。同定結果を表 47 に示す。

表 47 樹種同定結果

No.	遺構名	遺物 No.	器種	樹種	木取り	時期
1	SP 4	810	柱材	カヤ	芯持丸木	7世紀後葉以降

以下に、同定された材の特徴を記載し、写真 7 に光学顕微鏡写真を示す。

(1) カヤ *Torreya nucifera* (L.) Siebold et Zucc. イチイ科 写真 7 1a-1c (No. 1)

仮道管と放射組織で構成される針葉樹である。晩材部は薄く、早材から晩材への移行は急である。放射組織は単列で、1~5細胞高である。分野壁孔は小型のヒノキ型で、1 分野に 2~4 個みられる。また、仮道管の内壁には 2 本 1 対のらせん肥厚がみられる。

カヤは暖温帯に分布する常緑高木の針葉樹である。材は比較的重硬で弾力性に富み、切削等の加工は容易で、水湿によく耐える。

4 考察

SP 4 の柱材は、カヤであった。カヤは木理通直で真っすぐに生育し、比較的堅硬で加工性が良く、水湿によく耐える、という材質を持つ¹⁾。岐阜県可児市の柿田遺跡から出土した平安時代から鎌倉時代頃の柱材には、ヒノキやクリとともにカヤも多く利用されており²⁾、傾向は一致する。

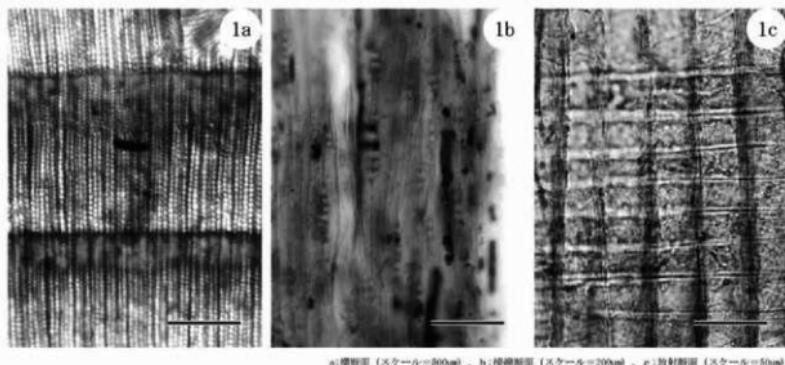


写真 7 光学顕微鏡写真

注

- 1) 伊東隆夫・佐野雄三・安部 久・内海泰弘・山口和穂 2011『日本有用樹木誌』、海青社: 238 p
 2) 伊東隆夫・山田昌久編 2012『木の考古学—出土木製品用材データベース』、海青社: 449 p

第3節 放射性炭素年代測定

1はじめに

出土した柱材を試料として、加速器質量分析法(AMS法)による放射性炭素年代測定を行った。分析は、伊藤 茂・佐藤正教・廣田正史・山形秀樹・Zaur Lomtadze・小林克也(株式会社パレオ・ラボ AMS 年代測定グループ)が担当した。

2 試料と方法

試料は、SP 4 から出土した生材の柱 1 点(試料 No. 1 : PLD-36509)である。最終形成年輪は残っていなかった。発掘調査所見では、7世紀後葉以降と考えられている。測定試料の情報、調製データは表 48 のとおりである。

試料は調製後、加速器質量分析計(パレオ・ラボ、コンパクト AMS : NEC 製 1.5SDH)を用いて測定した。

3 結果

得られた ^{14}C 濃度について同位体分別効果の補正を行った後、 ^{14}C 年代、曆年代を算出した。表 49 に、同位体分別効果の補正に用いる炭素同位体比($\delta^{13}\text{C}$)、同位体分別効果の補正を行って曆年較正に用いた年代値と較正によって得られた年代範囲、慣用に従って年代値と誤差を丸めて表示した ^{14}C 年代、図 145 に曆年較正結果をそれぞれ示す。曆年較正に用いた年代値は下 1 術を丸めていない値であり、今後、曆年較正曲線が更新された際にこの年代値を用いて曆年較正を行うために記載した。

^{14}C 年代は AD1950 年を基点にして何年前かを示した年代である。 ^{14}C 年代(yrBP)の算出には、 ^{14}C の

表 48 測定試料及び処理

測定番号	遺跡データ	試料データ	前処理
PLD-36509	試料 No. 1 遺構: SP 4 遺物 No. 0810	種類: 生材 試料の性状: 最終形成年輪以外 部位不明 器種: 柱 状態: dry	超音波洗浄 有機溶剤処理: アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄(塩酸: 1.2N, 水酸化ナトリウム: 1.0N, 塩酸: 1.2N)

表 49 放射性炭素年代測定及び曆年較正の結果

測定番号	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	曆年較正年代 (yrBP $\pm 1\sigma$)	^{14}C 年代 (yrBP $\pm 1\sigma$)	^{14}C 年代を曆年代に較正した年代範囲	
				1σ 曆年代範囲	2σ 曆年代範囲
PLD-36509 SP 4 試料 No. 1 遺物 No. 0810	-29.59 \pm 0.19	1468 \pm 18	1470 \pm 20	574-617 cal AD (68.2%)	560-640 cal AD (95.4%)

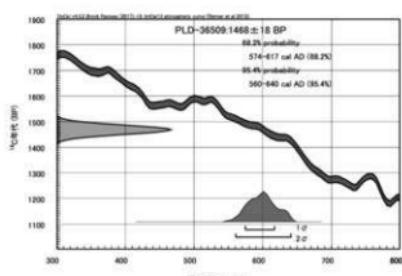


図 145 历年較正結果

近いものを算出することである。 ^{14}C 年代の历年較正には 0xCal4.3 (較正曲線データ : IntCal13) を使用した。なお、 1σ 历年年代範囲は、0xCal の確率法を使用して算出された ^{14}C 年代誤差に相当する 68.2% 信頼限界の历年年代範囲であり、同様に 2σ 历年年代範囲は 95.4% 信頼限界の历年年代範囲である。カッコ内の百分率の値は、その範囲内に历年年代が入る確率を意味する。グラフ中の縦軸上の曲線は ^{14}C 年代の確率分布を示し、二重曲線は历年較正曲線を示す。

4 考察

以下、 2σ 历年年代範囲 (確率 95.4%) に着目して結果を整理する。SP 4 の柱 (試料 No. 1 : PLD-36509) は 560–640 cal AD (95.4%) で、6 世紀中頃～7 世紀中頃の历年年代を示した。これは、古墳時代後期～飛鳥時代に相当する。なお、試料 No. 1 は最終形成年輪が残っていなかった。木材の場合、最終形成年輪部分を測定すると枯死若しくは伐採年代が得られるが、内側の年輪を測定すると、最終形成年輪から内側であるほど古い年代が得られる (古木効果)。したがって、今回の試料 No. 1 の測定結果は古木効果の影響を受けている可能性があり、その場合、実際に枯死若しくは伐採された年代は、測定結果よりも新しい年代であったと考えられる。発掘調査所見による SP 4 の柱の推定時期は 7 世紀後葉以降であり、測定結果は発掘調査所見による推定時期に対して整合的である。

参考文献

- 中村俊夫 2000 「放射性炭素年代測定法の基礎」『日本先史時代の ^{14}C 年代』日本先史時代の ^{14}C 年代編集委員会編 日本第四紀学会 : 3-20
- Bronk Ramsey, C. (2009) Bayesian Analysis of Radiocarbon dates. Radiocarbon, 51(1), 337–360.
- Reimer, P. J., Bard, E., Bayliss, A., Beck, J. W., Blackwell, P. G., Bronk Ramsey, C., Buck, C. E., Cheng, H., Edwards, R. L., Friedrich, M., Grootes, P. M., Guilderson, T. P., Hafidason, H., Hajdas, I., Hatte, C., Heaton, T. J., Hoffmann, D. L., Hogg, A. G., Hughen, K. A., Kaiser, K. F., Kromer, B., Manning, S. W., Niu, M., Reimer, R. W., Richards, D. A., Scott, E. M., Southon, J. R., Staff, R. A., Turney, C. S. M., and van der Plicht, J. (2013) IntCal13 and Marine13 Radiocarbon Age Calibration Curves 0–50,000 Years cal BP. Radiocarbon, 55(4), 1869–1887.

半減期として Libby の半減期 5568 年を使用した。また、付記した ^{14}C 年代誤差 ($\pm 1\sigma$) は、測定の統計誤差、標準偏差等に基づいて算出され、試料の ^{14}C 年代がその ^{14}C 年代誤差内に入る確率が 68.2% であることを示す。

なお、历年較正の詳細は以下のとおりである。历年較正とは、大気中の ^{14}C 濃度が一定で半減期が 5568 年として算出された ^{14}C 年代に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の ^{14}C 濃度の変動、及び半減期の違い (^{14}C の半減期 5730 \pm 40 年) を較正して、より実際の年代値に

第5章 総括

本章では、大野町教育委員会による平成24年度調査と当センターによる平成26年度調査の成果を踏まえ、六里遺跡における土地利用の変遷¹⁾と竪穴建物の傾向について述べる。土地利用の変遷については、今回の調査で遺構を確認した古墳時代後期、奈良時代、平安時代以降の3時期のみについて説明する。なお、遺構名は調査毎に付与しているため、本章に限り、遺構名の前に調査年度の数字を組み合わせて呼称する（例えば平成26年度発掘区のSD44は「26_SD44」）。

第1節 土地利用の変遷

（1）古墳時代後期（図146）

平成26年度発掘区では、微高地の縁辺部において北西から南東方向に向く直線的な溝状遺構26_SD44があり、その東側の低地には水田域、西側の微高地には集落域が広がる。平成29・30年度の発掘区は集落域がA・B・C地点に広がり、新たに竪穴建物20軒、掘立柱建物5棟（古代に下る可能性もある29_SB3・4・5を含む）を確認した。C地点の29_SD48では、26_SD44のように同じ位置で構の付け替えは認められなかったものの、微高地の縁辺部にほぼ同じ向きで設置された類似点から集落域の南西部を区画したと考えられる。A地点北半では、6世紀末から7世紀前葉にかけて竪穴建物の建て替えが顕著であるが、他の発掘区では点在ないし一定の距離を置いて建物が設置されており、様相が異なる。掘立柱建物については26_SB1や26_SB2のように、集落域の東端には特殊な性格のもの²⁾が建てられたが、集落域内にも少數ながら29_SB6が所在し、29_SB2は29_SB1と近接し建物の長軸方位が異なるため当該期に位置づけられる可能性がある。

B・C・D地点では、竪穴建物（29_SI12、30_SI19・S120）の廃絶後、溝状遺構（29_SD45、30_SD50・SD51）が掘削されていることを確認した。26_SD10・SD13・SD26と30_SD51、26_SD11・SD12と30_SD50は同一の遺構と思われ、微高地上を蛇行しながら東西方向に延びる。これらの溝状遺構は7世紀前葉に掘削され8世紀初頭までに埋没して、溝状遺構の南側に24_1号・2号・3号・10号竪穴建物が所在することが指摘されていたが、今回の調査により溝状遺構の北側にも7世紀中葉の竪穴建物（29_SI5・SI7・SI10）が所在することが明らかとなり、当該期には東西方向の溝状遺構によって集落域が南北に分かれていたと考えられる。

（2）奈良時代（図147）

今回の調査でも、奈良時代前半に遺構・遺物が激減する状況³⁾が確認でき、平成26年度調査の報告と整合する。竪穴建物1軒、掘立柱建物1棟、溝群を確認し、いずれの長軸方位も北西から南東方向に傾く。このうち、8世紀前半以降に建てられたと考えられる29_SB1の柱穴は、古墳時代後期の掘立柱建物と比較すると柱穴の掘方が方形である点や、掘方の長軸長が0.63m～0.86mと規模が大きい点が異なる。建物の一部しか確認していないためその性格については不明確な点が多いが、柱掘方が方形となり、掘方の長軸長が0.80m以上となるものは一般的に官衙関連遺跡で検出されることが多い⁴⁾ため、SB1は公的施設に関連する建物である可能性がある。溝群はSB1廃絶後の遺構で、水田に伴う

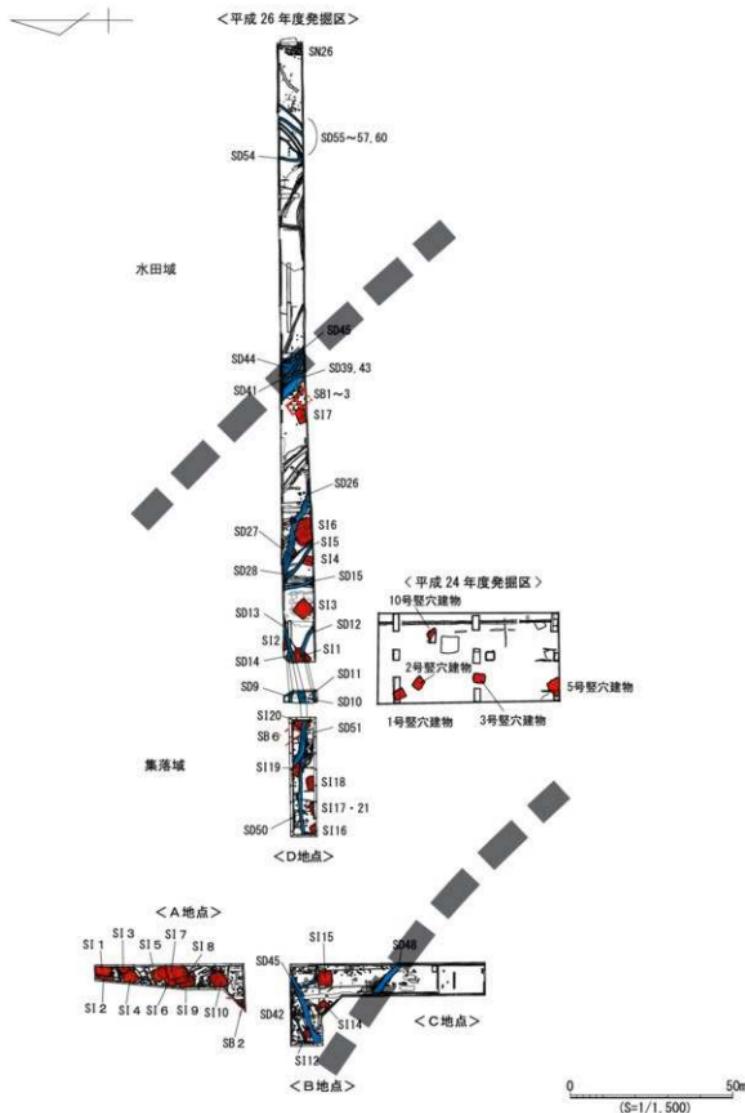


図 146 土地利用の変遷（古墳時代後期）

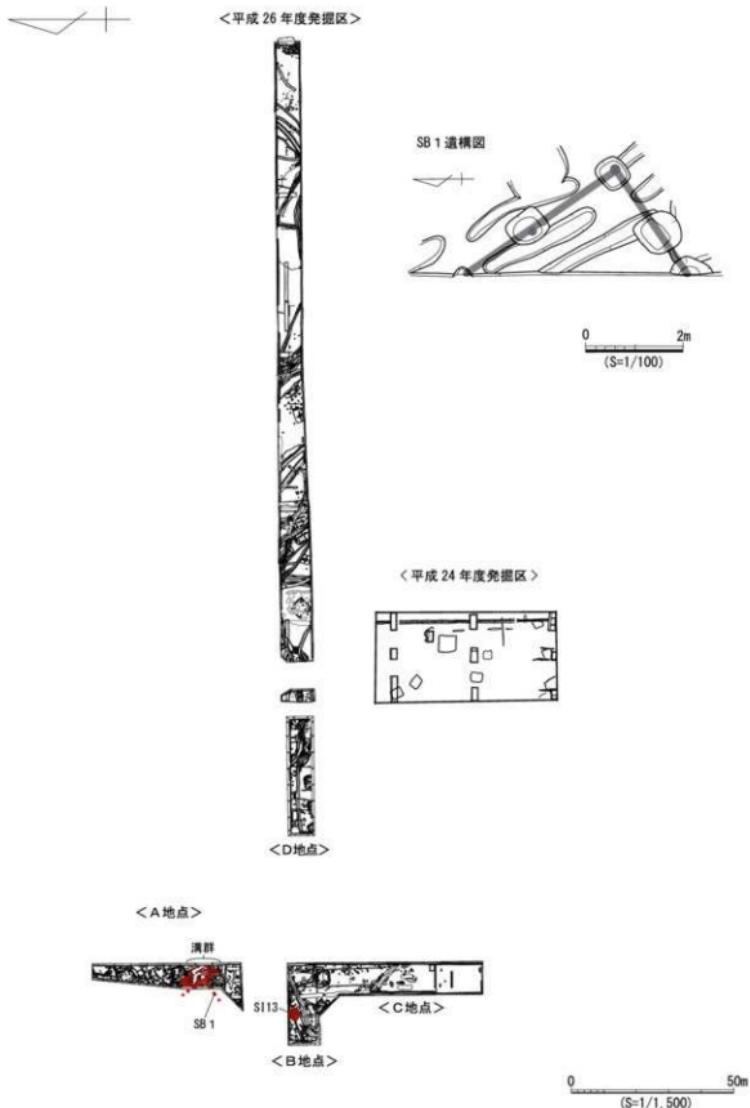


図 147 土地利用の変遷（奈良時代）

可能性があり、北西から南東方向に傾くため条里地割施行以前の遺構と推測する。

(2) 平安時代以降(図148)

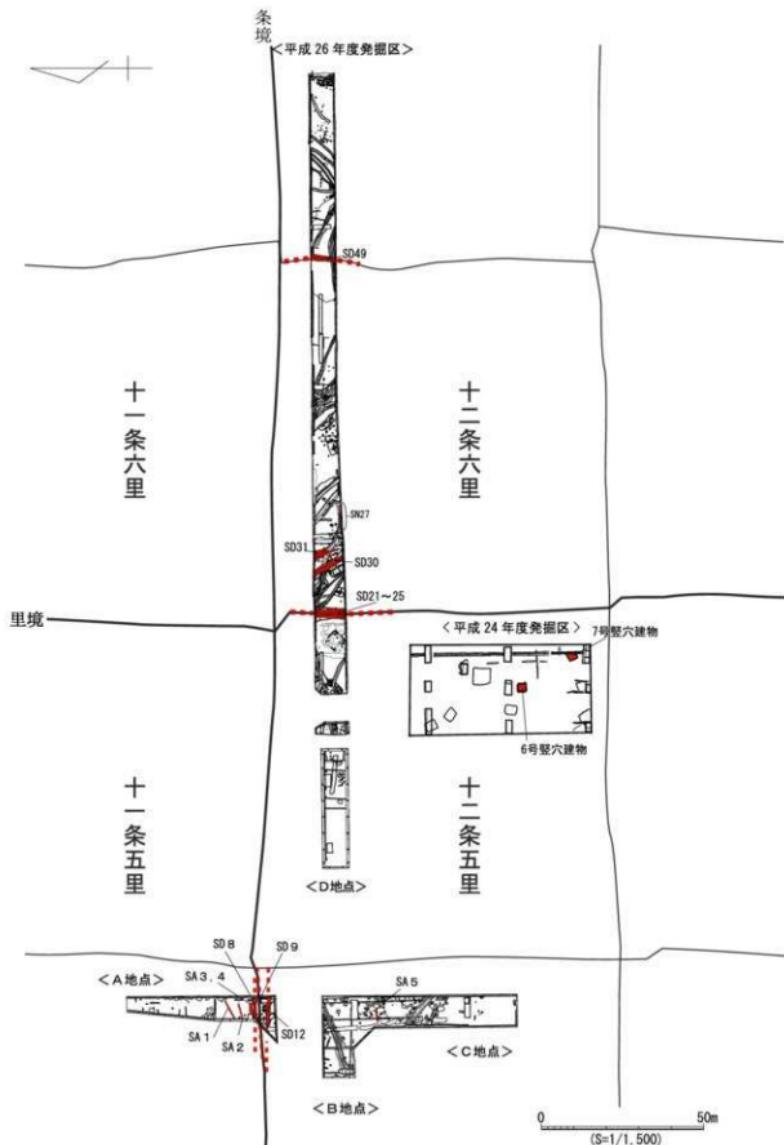
平成26年度調査では、26_SD49及び26_SD6、26_SD21～25はほぼ同じ場所で改修され、うち26_SD49は平安時代中葉以降に設置され、後者は復原条里十一条五里と六里の里境溝の可能性が指摘されている。発掘区周辺に条里地割復原図^⑤をトレースして重ねたところ、A地点の29_SD9は十一条と十二条の条境に位置する(第2章第2節参照)。29_SD9が圃場整備前まで機能していたとすれば、それに並行する29_SD8・SD12は先行する条境溝であった可能性があり、条里地割内で検出したA地点の土坑列29_SA1～4やC地点の29_SA5は、概ね南北軸に直交するため耕作に伴う遺構と考えられる。

第2節 壁穴建物の検討

今回の調査で確認した壁穴建物は、6世紀末から7世紀中葉にかけてのものが大半である。ここでは、平成24年度及び26年度調査分を含めて壁穴建物の①規模、②長軸方位、③カマド設置位置について検討する(表50)。なお、A地点北半とD地点では壁穴建物の分布状況が大きく異なるため、A・

表50 六里遺跡における古墳時代後期から奈良時代の壁穴建物一覧

区分	遺構名	所属時期	平面形状	規模(m)		長軸方位	南北軸からのずれ	カマドの設置個所			
				上端							
				長軸長	短軸長						
A	29_SI14	6c末～7c初頭	方形か長方形	1.15	(0.82)	N 40° W	11%				
	29_SI15	6c末～7c初頭	方形	4.48	4.38	N 2° E	96%				
	29_SI1	6c末～7c前葉	方形	(5.10)	(2.68)	N 8° E	82%				
	29_SI2	6c末～7c前葉	方形か長方形	(4.86)	(0.98)	N 20° W	56%				
	29_SI12	6c末～7c前葉	方形か長方形	3.94	(1.52)	N 76° E	69%	東辺			
B	29_SI3	7c前半以前	方形か長方形	(3.10)	(3.05)	N 33° W	27%				
	29_SI8	7c前葉か	方形	4.80	4.28	N 8° W	82%	北辺			
	29_SI9	7c前葉	方形	4.94	(4.10)	N 53° W	18%	北辺			
C	29_SI4	7c前半	不整形方	4.38	4.12	N 53° W	18%				
	29_SI6	7c中葉以前	方形	6.51	(5.90)	N 57° E	27%				
D	29_SI5	7c中葉	不整形方	4.76	3.76	N 24° W	47%	北辺			
	29_SI7	7c中葉	不整形方	5.26	(4.41)	N 13° W	71%	北辺			
	29_SI10	7c後半	不整形方	(5.14)	(4.52)	N 63° E	40%				
	29_SI11	不明(S15と同時期か)	方形か長方形	(3.53)	(0.86)	N 24° W	47%				
	29_SI13	8c代	隅丸方形	3.16	3.11	N 52° E	16%				
	24_5号壁穴建物	6c末～7c前葉か	方形か	5.06	3.79	N 30° W	33%	(未報告)			
	26_SI1	6c末～7c前葉	方形	5.44	(5.36)	N 41° E	9%				
	26_SI2	6c末～7c前葉か	方形か	(4.30)	(1.26)	N 70° E	56%				
	26_SI3	6c末～7c前葉か	方形	4.81	4.76	N 42° W	7%				
	26_SI4	6c末～7c前葉	方形	2.74	2.66	N 16° E	64%				
	26_SI5	6c末～7c前葉	方形	(2.66)	(2.11)	N 51° E	13%				
	26_SI6	6c末～7c前葉	方形	6.36	6.24	N 47° E	4%				
	26_SI7	6c末～7c前葉	方形	4.00	3.20	N 70° E	56%	東辺			
	30_SI17	7c前半	方形か	(4.40)	(2.39)	N 62° E	38%				
	30_SI19	7c前半	方形	5.10	4.96	N 56° W	24%				
	30_SI21	7c前半	方形か	(4.74)	(1.41)	N 73° E	62%				
	30_SI16	7c中葉	方形か長方形	(2.96)	(1.47)	N 61° E	36%	東辺			
	30_SI18	7c中葉	方形か	4.50	(2.31)	N 79° E	76%	東辺			
	30_SI20	7c後半以前	不整形方	4.00	3.71	N 44° E	2%				
	24_1号壁穴建物	7c中葉か	方形	3.47	2.88	N 27° W	40%	(未報告)			
	24_2号壁穴建物	7c中葉か	方形	3.55	2.80	N 46° W	2%	(未報告)			
	24_3号壁穴建物	7c中葉か	方形	3.81	2.91	N 7° E	84%	(未報告)			
	24_10号壁穴建物	7c中葉か	方形か	3.44	(2.22)	N 39° W	13%	(未報告)			
	24_9号壁穴建物	7c代	方形	5.40	5.10	N 0° E	100%	(未報告)			



B・C地点とD地点以東で比較する。

- ① 建物規模については、A・B・C地点及びD地点以東ともに長軸長3m未満のものや5mを超えるものが見受けられるが、7世紀中葉のD地点以東では4m程度にまとまる。
- ② 壁穴建物の長軸方位については、平成26年度調査と同様に南北軸からのずれ^⑥により比較する。A・B・C地点の6世紀末～7世紀前葉では、80%を超える南北軸に近い建物は3／9軒、40%未満の北東方向を向く建物は4／9軒であるが、7世紀中葉では40～50%のいわば中間軸の建物が3／4軒と割合が高い（7世紀中葉以前の29_S16はカウントから除外）。しかし、D地点以東の6世紀末～7世紀前葉では、南北軸に近い建物ではなく、北東方向を向く建物と中間軸の建物は半数程度混在し、7世紀中葉では南北軸・北東方向・中間軸とも認められる。建物の長軸方位が北東方向を向くことについては、発掘区周辺の微地形とも関連する可能性があるが、南北軸がどのような理由で設定されているのかは今後の課題である。
- ③ 現時点でカマドを伴った壁穴建物の確認数は少ないが、カマドの設置位置を比較すると、A・B・C地点では壁穴掘方の北辺、D地点以東では東辺に偏る傾向がある。

以上から、A・B・C地点とD地点以東では壁穴建物の長軸方位やカマドの設置位置に違いがあることが分かったが、その背景については発掘区周辺の調査や今後の研究に委ねたい。

注

- 1) 土地利用変遷図のうち平成24年度及び26年度調査の遺構については、岐阜県文化財保護センター2018第262～264図を参考にした。
- 2) 岐阜県文化財保護センター2018『六里遺跡・稻荷遺跡』
- 3) 6世紀末から7世紀第3四半期の畿内から東日本にかけては、集落の数が減少して新たな集落が再編される時期と考えられている（宇野1991）。六里遺跡では、6世紀末に始まった集落が8世紀初頭までには廃絶するという経緯をたどることから、同様の現象が起きていたと考えられる。
- 4) 奈良文化財研究所2000『古代の官衙遺跡 I 遺構編』
- 5) 大野町教育委員会2012『よみがえる古代の大野一大野町の条里と埋蔵文化財一』
- 6) 「算出に当たっては、まず西に傾く長軸を直交する東の傾きに換算し、この数値から45°を引くことで、平均となる北東方向からの分散を算出した。その上で、算出した数値を45で割り（マイナスの値はプラスに補正）、その比率をパーセントで示した。従って、割合が高いほど方位が南北軸に近いことを示す。」（前掲注2）

引用・参考文献

- 愛知県史編さん委員会 2007『愛知県史 別編 窯業2 中世・近世 濱戸系』
- 愛知県史編さん委員会 2015『愛知県史 別編 窯業1 古代 猿投系』
- 内堀信雄・井川祥子 1996「美濃における古代煮炊具の様相」『鍋と甕そのデザイン』、第4回考古学 フォーラム実行委員会
- 宇野隆夫 1991『律令社会の考古学的研究 北陸を舞台として』、桂書房
- 大熊賢昭 1985「第1章 風土と生物」『大野町史 通史編』、大野町
- 大崎哲人 1993「土師器甕の変遷とその背景-近江型土師器成立への諸段階」『紀要』第6号、財団法人 滋賀県文化財保護協会
- 大野町 1985『大野町史 通史編』
- 大野町 2010『大野町史 増補編』
- 大野町教育委員会 2006『大野町北部山麓古墳群発掘調査報告書』
- 大野町教育委員会 2009 a『大野の絵図 大野町遺跡詳細分布調査報告書資料（絵図）編』
- 大野町教育委員会 2009 b『大野町遺跡詳細分布調査報告書 資料（考古）編』
- 大野町教育委員会 2012 a『大野町埋蔵文化財試掘・確認調査等報告書-平成21~23年度-』
- 大野町教育委員会 2012 b『よみがえる古代の大野-大野町の条里と埋蔵文化財-』
- 大野町教育委員会 2013『大野町史跡条里跡（六里遺跡）の発掘調査』平成25年度岐阜県発掘調査報告会資料
- 小野木学 1997「美濃地方における中世前期の土師器皿の様相」『美濃の考古学』第2号、美濃の考古学刊行会
- 各務原市教育委員会 1984『美濃須衛古窯跡群資料調査報告書』
- 北村和宏 1996「尾張の羽釜」『鍋と甕そのデザイン』、第4回考古学フォーラム実行委員会
- 岐阜県 2003『岐阜県史 考古資料』
- 岐阜県教育委員会 2002『岐阜県中世城館跡総合調査報告書第1集（西濃地区・本巣郡）』
- 岐阜県文化財保護センター 2016『番場遺跡』
- 岐阜県文化財保護センター 2018『六里遺跡・稻荷遺跡』
- 財団法人岐阜県文化財保護センター 2001『佐口遺跡』
- 齋藤孝正 1995「東海西部（愛知・岐阜）」『須恵器集成図録』第3卷東日本編I、雄山閣
- 佐藤隆 1997「2 難波地域」『古代の土器研究-律令的土器様式の西・東5-7世紀の土器-』、古代の土器研究会
- 城ヶ谷和広 1996「総論 東海地方の古代煮炊具の様相と諸問題」『鍋と甕そのデザイン』、第4回考古学フォーラム実行委員会
- 鈴木 元 2012「21 岐阜県／出土木製品用材データベース」『木の考古学-出土木製品用材データベース-』（伊東隆夫・山田昌久編）、海青社
- 竹内勝也 2011「第1章 調査の目的と背景」『大野の条里 大野町遺跡詳細分布調査報告書 条里編・解説編』、大野町教育委員会
- 竹谷勝也 2011「第2章 歴史地理学調査」『大野の条里 大野町遺跡詳細分布調査報告書 条里編・

- 解説編』、大野町教育委員会
- 竹谷勝也 2011「考古学的調査」『大野の条里 大野町遺跡詳細分布調査報告書 条里編・解説編』、
大野町教育委員会
- 竹谷勝也 2011「第4章 大野郡の条里プラン」『大野の条里 大野町遺跡詳細分布調査報告書 条里編
・解説編』、大野町教育委員会
- 太宰府市教育委員会 2000『太宰府条坊跡X V－陶磁器分類編－』
- 中村治 2001『和泉陶邑窯出土須恵器の型式編年』芙蓉書房出版
- 奈良文化財研究所 2003『古代の官衙遺跡 I 遺構編』
- 新名強 2013「古代東海地方における製塩状況」『第16回 古代官衙・集落研究集会報告書 塩の生産・
流通と官衙・集落』、奈良文化財研究所
- 日本貨幣商協同組合 1993『日本貨幣カタログ 1993年版』
- 八賀晋 2011「地形環境と開発」『大野の条里 大野町遺跡詳細分布調査報告書 条里編・解説編』、
大野町教育委員会
- 藤澤良祐 2005「瀬戸系」『中世窯業の諸相～生産技術の展開と編年～』発表要旨集、「中世窯業の諸
相～生産技術の展開と編年～」実行委員会
- 水野時二 1971『条里制の歴史地理学的研究』、大明堂
- 森泰通 2009「古代美濃における堅塙の生産・流通・消費」『木曾川流域の自然と歴史』、木曾川学研
究協議会
- 渡邊博人 1996「美濃の後期古墳出土須恵器の様相－蓋坏の型式設定とその編年試案－」『美濃の考古
学』創刊号、美濃の考古学刊行会
- 渡邊博人 2008「美濃須衛窯について」『日本考古学協会 2008年度愛知大会研究発表資料集』、日本
考古学協会 2008年度愛知大会実行委員会
- 山下峰司 1995「4. 灰釉陶器・山茶碗」『概説 中世の土器・陶磁器』、中世土器研究会編
- 山中敏史 1994『古代地方官衙遺跡の研究』塙書房
- 横幕大祐 2000「美濃・飛驒の畿内産土師器」『美濃の考古学』第4号、美濃の考古学刊行会

図版1 発掘区全景（1）



A地点第1調査面全景（北から）



A地点第2調査面全景（北から）

図版2 発掘区全景（2）



B地点第1調査面全景（東から）



B地点第2調査面全景（東から）

図版3 発掘区全景（3）



C地点第1調査面全景（南から）



C地点第2調査面全景（南から）

図版4 発掘区全景（4）



D地点第1調査面全景（東から）



D地点第2調査面全景（上が北）

図版5 各遺構(1)



SA3・SA4 完掘状況（東から）



SK23 土層断面（北西から）



SD8 土層断面（西から）



SD8・SD9・SD12 完掘状況（北東から）



SI1 完掘状況（南東から）

図版6 各遺構（2）



SI2 完掘状況（南東から）



SI2-P2 土層断面（北から）



SI2-P2 完掘状況（北から）



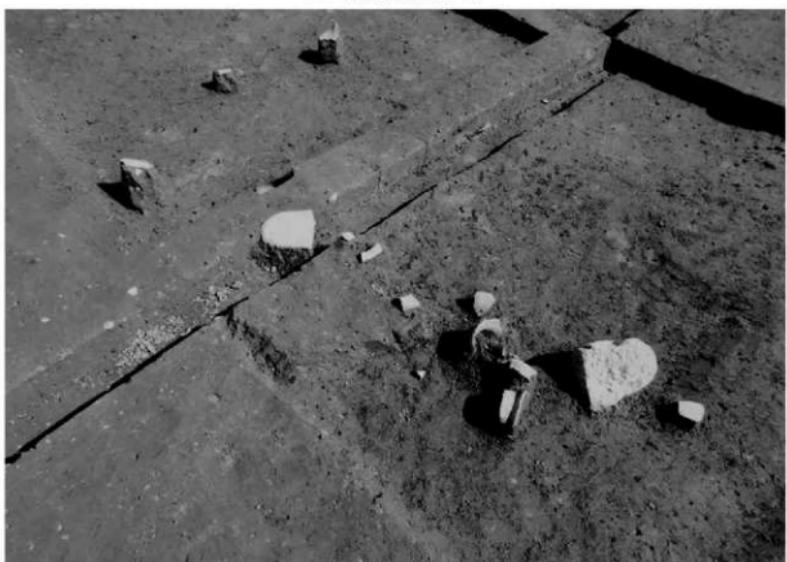
SI3 完掘状況（南から）



SI4 完掘状況（南から）

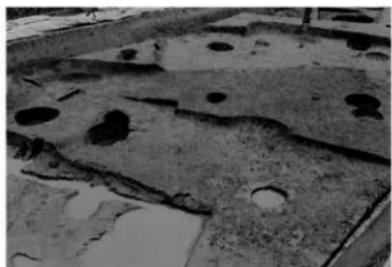


SI 5 完掘状況（南から）



SI 5 遺物出土状況（北西から）

図版8 各遺構(4)



SI 6 完掘状況（南東から）



SI 6-P2 土層断面（西から）



SI 7 完掘状況（南から）



SI 7-カマド 遺物出土状況（南東から）



SI 7-P1 土層断面（北から）



SI 8 完掘状況（南から）



SI 8-カマド 遺物出土状況（南東から）

図版 10 各遺構 (6)



SI 9 完掘状況（南から）



SI 9-カマド 完掘状況（東から）

図版 11 各遺構 (7)



SI10 完掘状況（南から）



SI10 遺物出土状況（東から）



SB 1 完掘状況（南東から）



SB 1-P3 土層断面（北から）



SB 1-P3 完掘状況（北から）

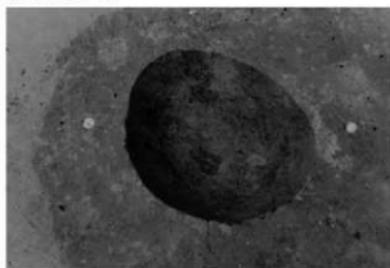
図版 12 各遺構 (8)



SB 3・SB 4 完掘状況（南西から）



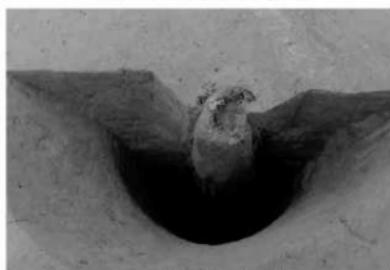
SB 3-P 6 土層断面（東から）



SB 3-P 6 完掘状況（東から）



溝群 完掘状況（南東から）



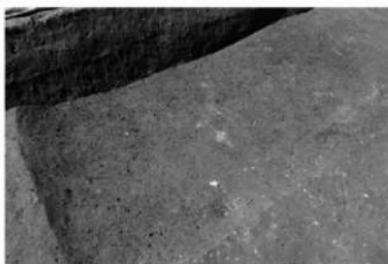
SP 4 土層断面（南から）



SP 4 完掘状況（南から）



SK127 完掘状況（北から）



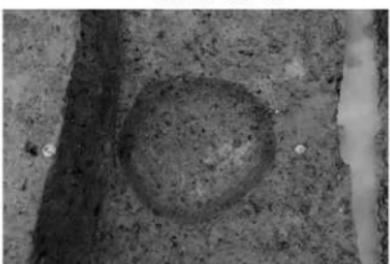
SK128 完掘状況（南東から）



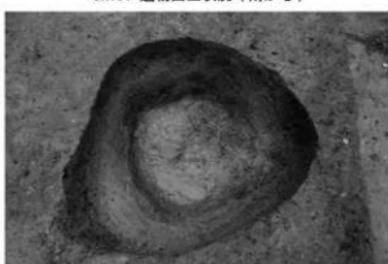
SK130 完掘状況（南から）



SK131 遺物出土状況（南から）



SK131 完掘状況（南から）



SK132 完掘状況（南から）



SK143 完掘状況（北から）

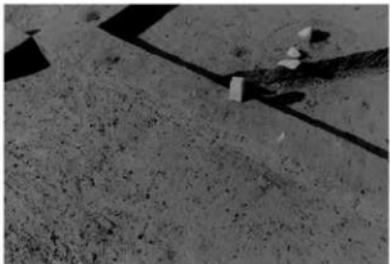
図版 14 各遺構 (10)



SK435 完掘状況（南東から）



SK448 完掘状況（東から）



SK448 土層断面（東から）



SK448 遺物出土状況（西から）



SI11 完掘状況（東から）



SI11 土層断面（南から）



SI12 完掘状況（西から）

図版 16 各遺構 (12)



SI12- カマド 遺物出土状況（西から）



SI13 完掘状況（南から）

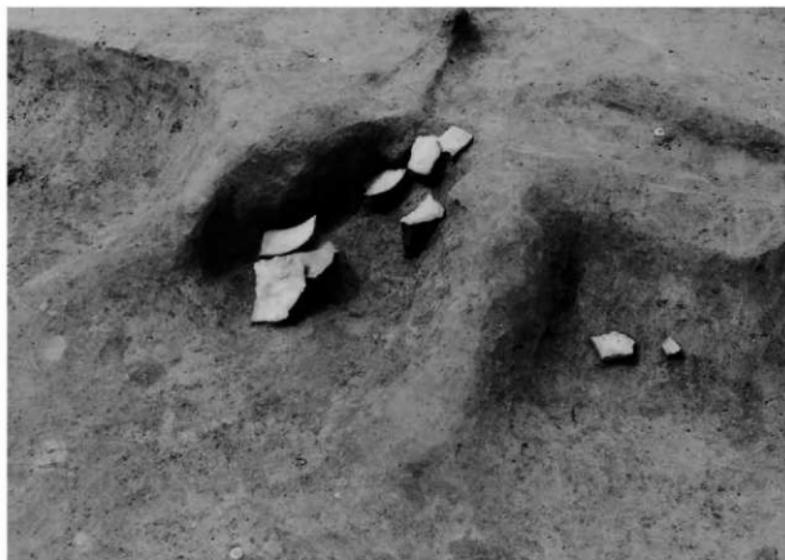


SI14 完掘状況（北から）



SI15 完掘状況（南から）

図版 18 各遺構 (14)



SI15- カマド 遺物出土状況（南東から）



SD45 完掘状況（南西から）



SD45 土層断面（西から）



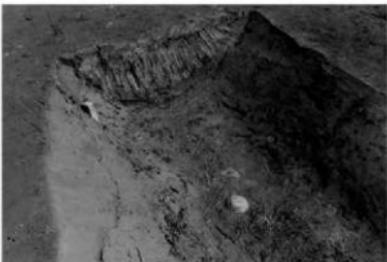
SD45 遺物出土状況（北東から）



SD48 完掘状況（南東から）



SD48 土層断面（南東から）



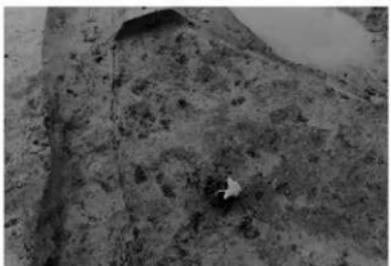
SD48 遺物出土状況（北西から）



SD42（南西から）



SD46（東から）



SK411 遺物出土状況（東から）



SK253 土層断面（南から）

図版 20 各遺構 (16)



SK212 遺物出土状況（西から）



SK237 遺物出土状況（東から）



SI16 完掘状況（南西から）



SI16-カマド 遺物出土状況（北西から）

図版 22 各遺構 (18)



S117 完掘状況（南西から）



S121 完掘状況（南西から）



SI18 (南西から)



SI18- カマド 遺物出土状況 (北西から)

図版 24 各遺構 (20)



SI19 完掘状況（北西から）

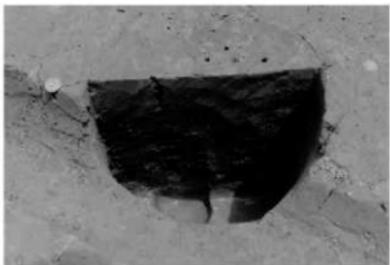


SI19 遺物出土状況（南東から）

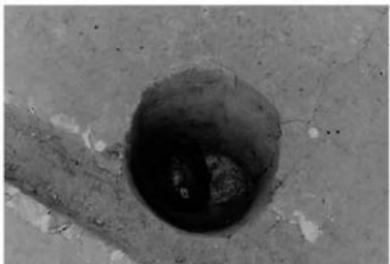
図版 25 各遺構 (21)



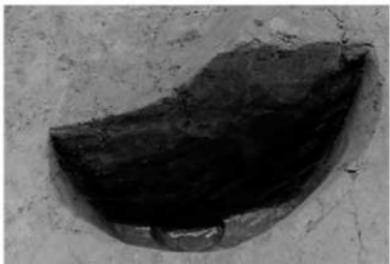
SB 120 完掘状況（南西から）



SB 6-P2 土層断面（西から）



SB 6-P2 完掘状況（西から）



SB 6-P5 土層断面（南から）



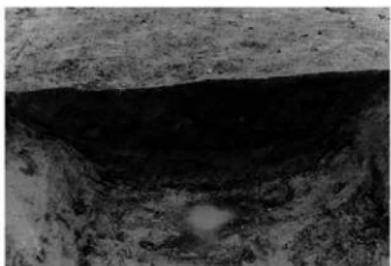
SB 6 完掘状況（上が北）

図版 26 各遺構 (22)



SD50・SD51 完掘状況（東から）

図版 27 各遺構 (23)



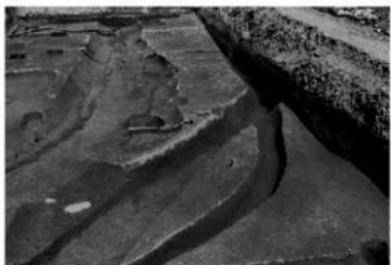
SD50 土層断面（東から）



SD51 土層断面（南東から）



SD51 遺物出土状況（北東から）

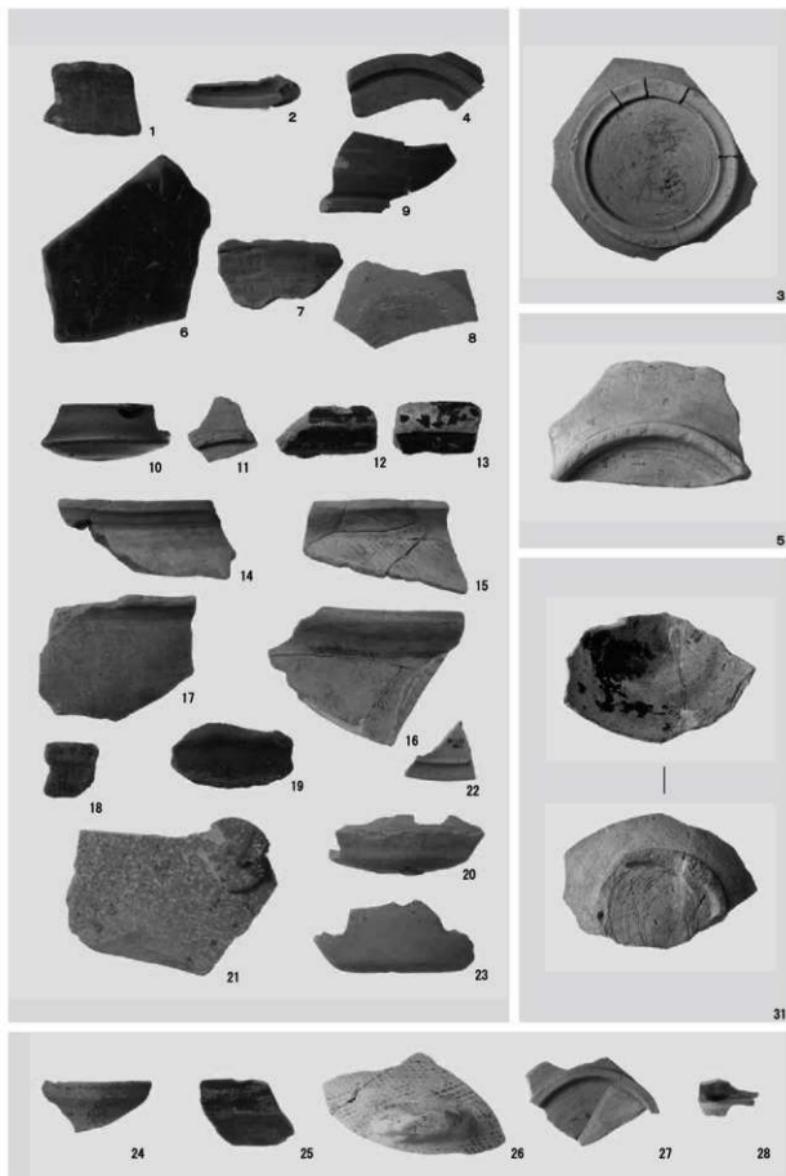


SD52（西から）

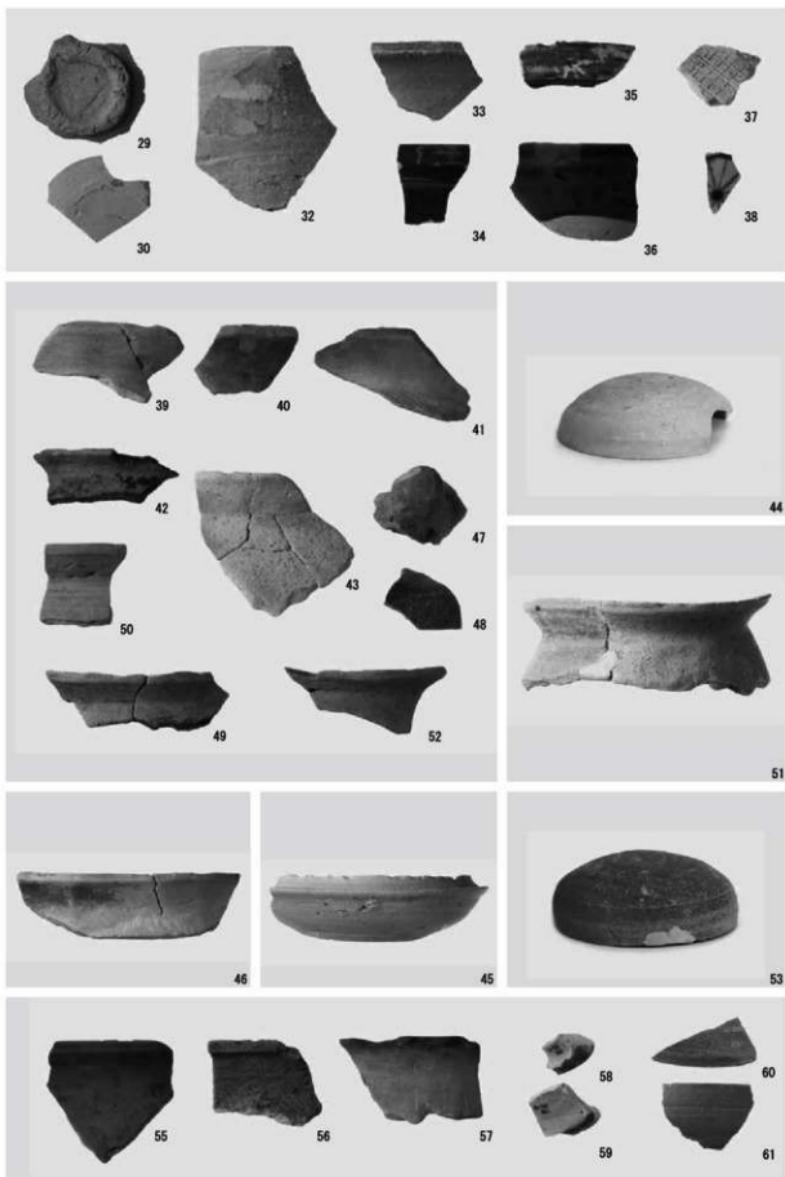


SD52 土層断面（東から）

図版 28 出土遺物 (1)



図版29 出土遺物(2)



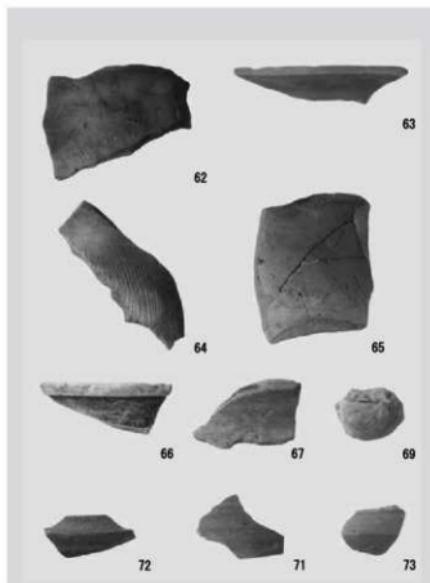
図版 30 出土遺物 (3)



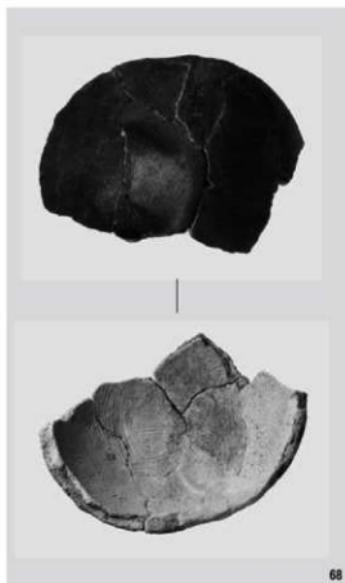
54



75



73



68



80



83

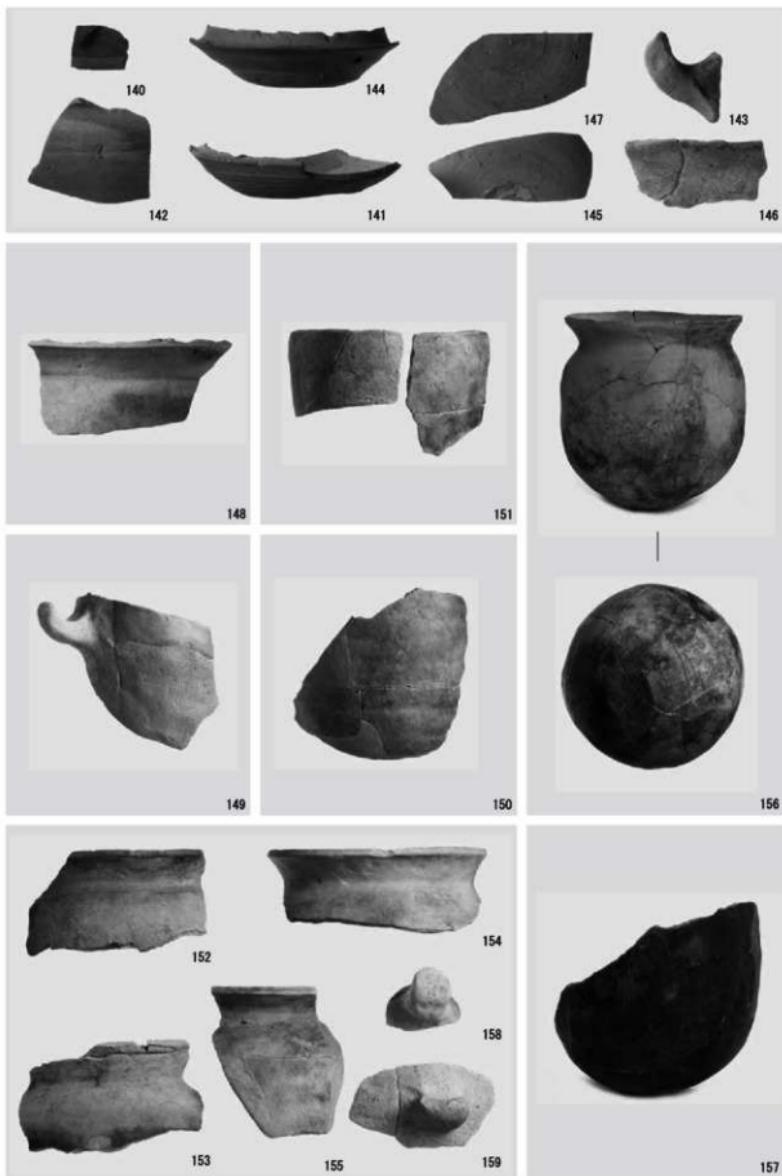
図版31 出土遺物(4)



図版 32 出土遺物(5)



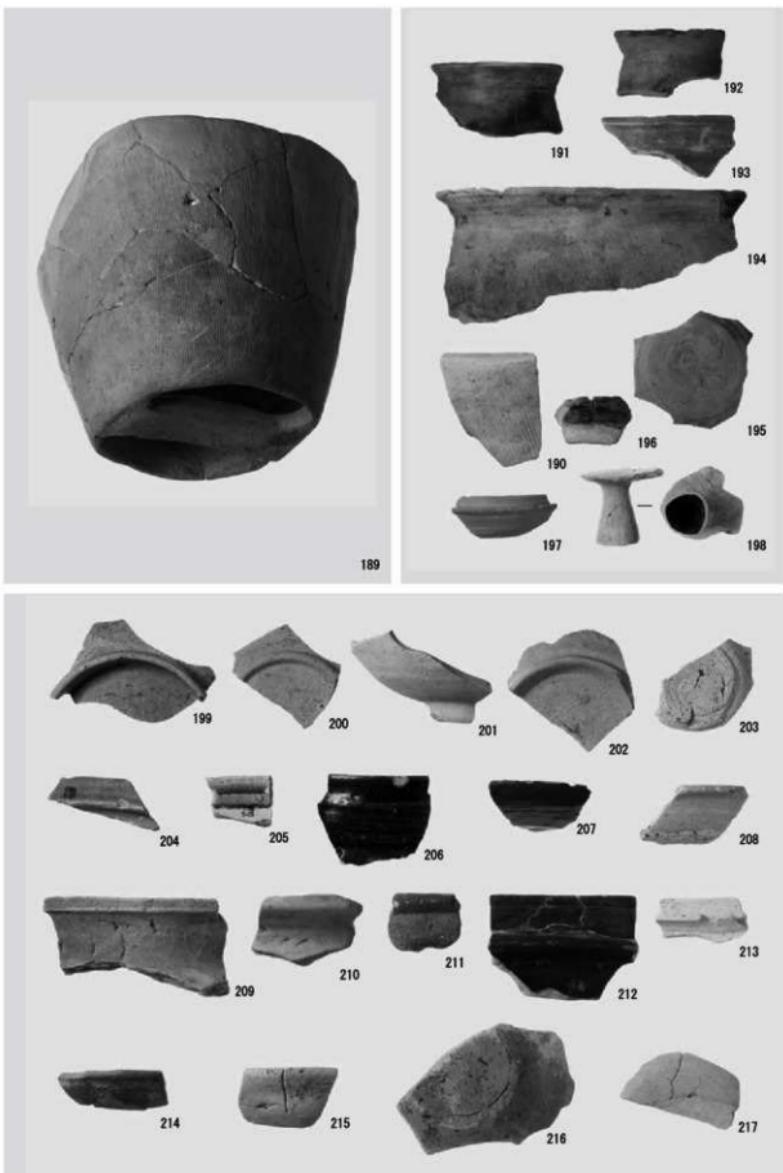
図版33 出土遺物(6)



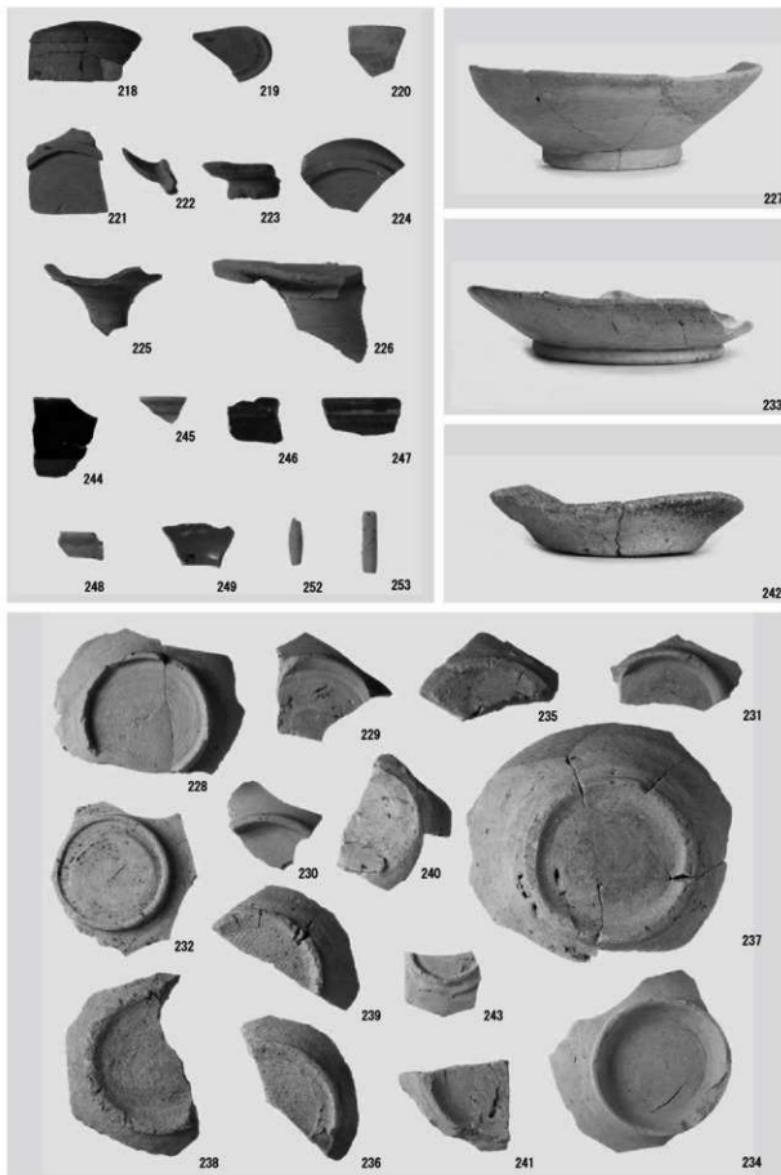
図版 34 出土遺物 (7)



図版 35 出土遺物 (8)



図版 36 出土遺物 (9)

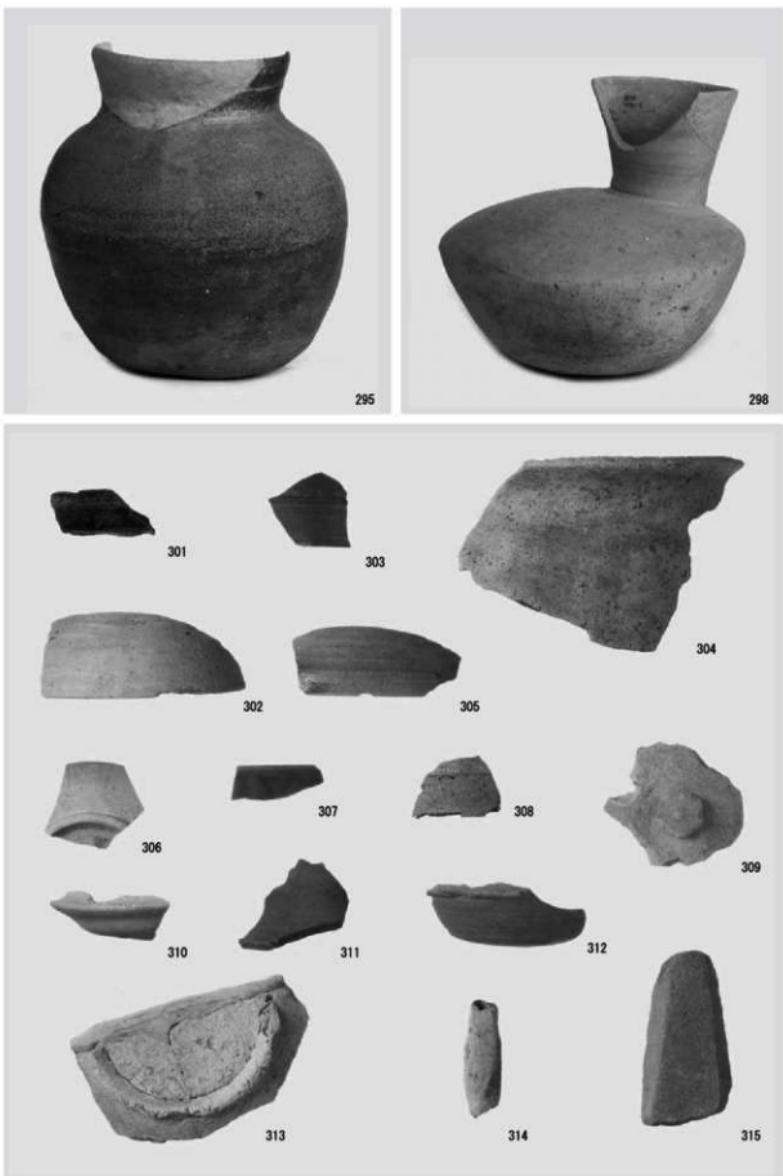




図版 38 出土遺物 (11)



図版 39 出土遺物 (12)



報 告 書 抄 錄

岐阜県文化財保護センター調査報告書 第145集

六里遺跡Ⅱ

2019年10月31日

編集・発行 岐阜県文化財保護センター

岐阜市三田洞東1-26-1

印 刷 株式会社もとすいんさつ